

## 過去の地震から知る、未来の備え ～後かたづけで気をつけること

名古屋大学災害対策室 木村玲欧

未来の地震にそなえるためには、過去の地震を知ることが大切。1945年にこの地域で2,306人の死者を出した「三河地震」から、未来の備えにつながる教訓を考えていきます。

■母親が亡くなったため、天涯孤独になってしまった。親せきの家に身をあずけて、全壊した自宅の細かな後かたづけを、自分一人でやらなければならなかった。(明治村城ヶ入集落(安城市城ヶ入町)・岩瀬繁松さん)

後かたづけは、集落にいる親せきがみんな来てくれただね。ただし、全部やってくれへん。向こうも生活や田畑があるからね。

それで大体かたづけてくれた後に、自分一人であっちやったりこっちやったりした。寝るところや食べることは親せきのところで一緒にさせてもらって、昼間は一人で壊れた家の片づけをしました。

集落の外から、今でいうボランティアみたいなものは来なかった。田舎なんで一族と隣組でなんとかしました。



絵 藤田哲也

後かたづけは、普段の大掃除や宴会のかたづけとは違います。地震で多くのものがぐちゃぐちゃになったなかで、「壊れたもの・使うことができないものを捨て、重要なもの・必要なものを取り出してきれいにする」作業になります。その労力は、普段のかたづけとは比べものになりません。

これまでの地震をみると、親せきが総動員でやってきたり、近所・友人・会社関係者などの日頃からのつながりなどによって後かたづけを行いました。また、阪神・淡路大震災以降は、大量のボランティアが被災地に入って、より迅速・効率的で組織的な後かたづけが実施されました。災害の後かたづけは、「さまざまな人々が入り乱れて作業してまわる集団戦」のような状態だと言えます。

このときに注意すべきことは、「より早くかたづける・きれいにする」ことを優先するあまり、「捨てる・捨てないの判断を、簡単に行わない・求めない」ことです。ある被災者は「自分の家の細かな後かたづけには時間がかかる。1つ1つのものについて、あれこれ迷いながら、捨てるべきか捨てざるべきかを考えているときに、他人から『これ捨てますよ！いいですか？』と聞かれると、手伝ってもらっていることもあって、『わかりました。お願いします！』と答えてしまい、あとから『捨てなければよかった』と後悔するものが多かった。深く考えずに即答する自分が悪いが、他人の家のものを簡単に『捨てますか？』と聞く人たちの、ものの聞き方にも配慮がほしかった」と振り返っていました。

多くの写真が入ったアルバム、思い出の手紙・ノート、人形・ぬいぐるみ、コレクションの数々、長く使っていた食器・調理器具、形見の品物など、他人から見たらもしかしたら財産的な価値が低いものでも、当人にとっては命の次に大切なものも多いのです。特にボランティアとして他人の家の後かたづけを手伝う際には、このような事実に対する配慮も必要になります。